東京都市大学共通教育部紀要 2017 Vol.10

Description of Frequency in English-Japanese Dictionaries in the First Half of the Twentieth Century

英和辞典の頻度に関する記述：20世紀前期

土肥 一夫

Journal of Liberal Arts and Sciences at Tokyo City University Vol.10,2017

英和辞典の頻度に関する記述：20世紀前期

外国語共通教育センター　土肥 一夫

1　はじめに

ITの進歩により20世期の後期にはデータ収集が容易となり、とりわけ英国では1980年代以降に母語のデータに基づく研究が盛んになり、90年代に入ると学習上の重要な情報として頻度（frequency）に関する記述が外国人英語学習者向けの辞書で不可欠となった。収録語句、語義、文法・語法、用例、類義語等においてデータの役割が増大した。90年代は英国政府の支援によるデータ収集から話し言葉と書き言葉に関する記述も盛り込まれるようになった。現代の英語学習者の効率的学習を考慮しこの種の情報の有益性は否定できない。

一方で、本邦の英和辞典ではどのような記述が行われてきたのか。本稿は20世期前期に焦点を当て振り返る。当時は米国での人海戦術による語彙調査が極めて大きな影響を与えていたことが明確になる。中でも、竹原常太（1879―1948）の業績に関して拙稿（1999）で簡略に言及したことがある。竹原と同世代の米国の教育心理学者でコロンビア大学のEdward Thorndike（1874－1949）が関与した語彙研究と英語の辞書に関する論考であった。

本稿は20世紀の英和辞典の編纂に大きな影響を持つと考えられる収録語句（見出し語）と頻度表記に関して、近年の研究対象である20世紀前期の英和辞典の変遷の視点から竹原を中心に主に1930年代の二、三の英和辞典を再考する。なお紙面の制約上、時代背景の詳細は割愛する。

2　竹原常太の著作

竹原には幾つかの著作があり、竹原文庫として多くが大手前大学に収蔵されている。竹原の主要作は年代順には下記のようにまとめられる。なお、

没後に『新スタンダード英和辞典』（大修館書店、1959）が刊行されている。竹原の学歴はミシガン大学の修士号、ニューヨーク大学の博士号で「近松とシェークスピア」が学位取得論文とされる。

『英語慣用句詳解』（*Idiomatic English Phrases Now in Use*）1906

『スタンダード和英大辞典』(*A Standard Japanese-English Dictionary*)[*1]　1924

『スタンダード英和辞典』*(A Standard English-Japanese Dictionary*)　1929

『語学教育の合理化』1930

『ソーンダイク基本英語単語』(*Thorndike's English Word Book*)　1934[*2]

『高等女学校英語教材の合理化』1934

『中等学校英語教材の科学的編纂法』1936

『ソーンダイク基本構文　新英文解釈法』1936

高梨・出来（1993：146）には「竹原は留学時代から和英辞典の編纂を志し、三省堂から出版することになっていたが、編集方針が合わず中止。神戸商業高等学校に赴任して校長水島鉄也と出会い、その骨折りで「竹原辞典後援会」が作られ、大正一三年に『スタンダード和英大辞典』が刊行された」とある。そのため、著作権発行者は「西灘村(兵庫縣)：竹原常太」と表記され、発売所の寶文館から刊行された。

竹原の業績を穂積(2008:73)は「英語（和英・英和）辞典、英語教育（英語基礎語彙、教育方法）研究、旧制中学・女学校の教科書編集」の三分野に分割しているが、英語の基礎語彙の研究とも絡んで「スタンダード」と称する和英辞典、英和辞典の編纂は竹原の残した大きな業績である。

『スタンダード和英大辞典』に関しては堤（1999）、穂積（2008）等の研究でも注目されてきた。高梨・出来（1993：146）は次のように説明している。[*3]

「この辞典は三六四種の定期刊行物や書籍から三〇万の文例を収集し、この文例を利用して編集したもので引用文には出典が明記してある。和臭のない例文を提供しているのが最大の特徴であり、すぐれた点であるが、当然のことながら日本の風物や日本的表現に弱点を持つのはやむを得ない。」

ちなみに、竹原のPreface (p. II) には30万のうち約6万例を利用したとある。

また堤(1999：122－123)は、竹原は最初の米国留学(1899－1905)後に教壇に立ち英語を教えながら、日本に良い辞書がないことに不満を抱き、辞書編纂を志すようになったと言う。1908年に文部省英語教員試験の合格した

ころから、竹原は辞書編纂を目指し英文雑誌等から例文の切り抜きをスクラップブックに貼りつけていたとされる。そして第二回目の米国留学は「辞書編纂のためであった」と堤は言う（1999 :123)。年代で判断すると、竹原(1906) は第一回の留学時の資料収集が結実した成果であると判断するのが妥当であろう。しかも初回留学から帰国直後の著作であった。竹原のデータを重視する記述的研究法から生まれた著作は20世紀前期の英語研究者の主たる方法の産物であった。初回留学の約6年間には博士号の取得もあったであろうが、辞書編纂の資料収集には絶好の機会であった。

和英辞典への言及はしないが、竹原はOED初代編者のマレー同様に様々な英文を資料として収集し活用した。記述的な和英辞典の編纂を試行した視点から注目すべき著作である。この発想は竹原（1906) で既に生かされ、この著作は本文147（索引34) ページに様々なフレーズと例文を付け、典拠とする新聞・雑誌名も記している（ただし、年月、号数等なし)。20代半ばにして独自の英語資料の収集による成果を公表していた。

3　竹原常太『スタンダード英和辞典』(1929)[*4]

堤(1999:127) は標記の辞書に関して次のように記している。

「初めての基本的単語とその重要性の順位を確立して、英語教育法および学習法を合理化することを実現させた辞書。ソーンダイクによる単語の頻度数統計に拠って、重要基本単語一万語を選び、さらにそれを約千語ずつ、頻度数によって10の群に分け、1から10までの数字で明記した。この特色はやがて他の辞書にも取り入れられるようになった。」

拙稿(1999) で言及した英和辞典は竹原の『スタンダード英和辞典』（以後『スタンダード』の略記）の他に、『岩波英和辞典』（岩波書店、1936) と『雙解英和辞典』（冨山房、1944) の三辞典であった。今回は、その他の1930年代の英和辞典に言及し、『スタンダード』の詳細に言及したい。なお、堤はソーンダイクのみに言及している点で厳密さに欠ける。

ソーンダイクの *The Teacher's Word Book*（以下『一万語』と表記）が、コロンビア大学から1921年に刊行され、後に増補改訂が行われ1931年に『二万語』（*A Teacher's Word Book of the Twenty Thousand Words*)、さらに1944年に弟子のI. Lorgeとの共著『三万語』（*The Teacher's Word Book of 30,000 Words*）

が刊行された。これと並行し*The Thorndike-Century Junior Dictionary* (1935) がまず刊行され、その後*Thorndike Century Senior Dictionary* (1941), *Thorndike Century Junior Dictionary*: Revised Edition (1941), *Thorndike Century Beginning Dictionary* (1945) とレベル別学習者対象の辞書が出版されたことは拙稿 (1999) で述べた。

コロンビア大は竹原の留学先と関係はなく、既に神戸商業高等学校教授として在職しており、ソーンダイクと著作を知りえた経緯は不明である。『スタンダード』刊行後に、ソーンダイクの著作の邦訳版に関与していることから、英語母語話者の初級・中級レベルの学生が学習すべき語彙研究に関与するソーンダイクに、竹原は英語教材の合理化と英語教科書の編纂の視点から共感する部分が多かったと考えられる。竹原には語学教育に関する上述三部作があり、初期の著作は『スタンダード』刊行の翌年の竹原（1930）である。

竹原（1930）は語学教育合理化運動に関連して「(5) ソーンダイク博士の基本標準語」で下記の記述をしている。

「外国語を學習する場合に、最も多く使用される語彙卽ち使用價値の多い語から先に學習す可きものである事は何人も否定することの出來ない事である。而もこの常識的に考へて明白な眞理が、最近まで教育的には實行されなかつたのである。其理由は基本語の重要性を認めながら、今日迄如何なる語彙が基本的標準語であるかを明らかにする事が出來なかつた爲である。（中略）エドワード・ソーンダイク博士が、千九百二十二年[*5] に發表した基本單語一萬語表は教育上又言語學上眞に一新紀元を劃すべき勞作である。（中略）ソ博士は基本語確立に當り、教育家又は專門家の主勸的判斷によつて決定したものは無價値であつて、各語の使用價値は各種の文献に現はれた其使用度數を統計的に精査し、其frequencyによつて其重要順位を客観的に確定すべきものであるといふ原則の下に、十餘年を費してreadingを本位として各種の文献（總語數約五百萬語を含む）に就いて各語の使用度數の統計を取り、最高點を得た語から左記の如くに順次之を配列し、基本一萬語表を編纂したのである。」（pp. 五〜六）

続く「(8) ホーン博士の作文本位基本語」では次のように記している。

「ホーン博士は作文を本位とした自己の基本語表と、讀書を本位としたソーンダイク基本語表とを比較して基本英語研究者にとつて大いに興味ある新事實を提供してゐる（中略）ソーンダイク五、〇〇〇語表中の四、八三〇語

がホーン表にも載つている（中略）斯くの如くにしてreadingから見ても亦writingから見ても、基本的標準語は略ぼ同じであるといふ事が統計的に立證され、基本語の學習價値は愈々確認さるゝに至つたのである。」（p. 八）

そして「(10)單語のActive とPassiveとの區別」で両者の違いは意識しながら、結論では「語の使用價値を決する唯一の規準は基本單語表に示された其順位である」（p. 一一）と記している。後の竹原の教科書の編纂においても基本語を重視したのはソーンダイクの影響の大きさを証明している。

ソーンダイクに共感し影響を受けた竹原は辞書編纂においても合理的な編纂を試行した。これを裏付けるように辞書の序で次のように記している。

「『読書、作文、會話に於て基本的單語の知識は極めて肝要である。然るに此の基本的單語を學ぶに三つの障碍がある。第一に學習者は如何なる語が基本語たるかを知らず、第二に常用基本語の重要性を理解せず、第三に基本語學習の方法を知らざること、即ち是れである。基本語の習得は主として學習者の自發的に獨習に俟たねばならない。（中略）學習者をして單語を自發的に獨習せしむる方法を授けざる限り、語學教授は失敗に終るものである。」（p. 1）

次に、基本語の確立にソーンダイクとホーンの二人が各々readingとwritingの視点から語の使用度數(frequency)の統計を公表したことを述べている。ホーンの著作*A Basic Writing Vocabulary : 10,000 Words Most Commonly Used in Writing*は1926年の刊行である。そして辞書の序で竹原は「標準基本單語の何たるかの問題は兩博士に依つて統計的數字的に解決されたのである」（p. 2）と断言している。

さらに両者の基本語表を利用した英語教授と英語学習上の効率向上に資する提案から、竹原は七つの標準的基本語彙の実用的価値を述べている。

1　The evaluation of textbooks; gradation in readers
2　The establishment of standards
3　The teaching of words, and improvement of methods of teaching and studying spelling
4　Pedagogical significance of emphasizing simple words of English
5　A standard vocabulary for the teaching of foreigners
6　A standard vocabulary for teaching a foreign language
7　Improvement of dictionaries

ソーンダイクの影響を受け英語の教科書も編纂している竹原が最優先した

のは堤でも言及されたように、『スタンダード』であったと考えられる。

「凡例」の「編纂資料と方針」(p. 5)では、『スタンダード』が主に一般学生と英語の新聞・雑誌の読者向けであることを述べ、従来のポケット型(『スタンダード』自体もポケット型と称されうる小型の辞書であるため、この表記を用いたと考えられる)の英和辞典の缺陥から、邦人学生にとり必要なidiomatic constructionには特に注意し編纂し、その際には『スタンダード和英』とその編纂資料を利用したと記している。idiomatic constructionの言及は竹原（1906）で慣用句に関心を寄せていたことも一因であろう。しかし、処女作とは異なり『スタンダード』は用例を必ずしも豊富に提示せず、出典提示もない。もし和英大辞典同様に語義、成句等で用例を数多く記載していれば、『スタンダード』の実用的価値は発行部数とは別に高く評価されたと考えられる。版型とページ数、それと収録する見出し語の数からは不可能であった。その点から、『スタンダード』は和英大辞典とは視点の異なるreception(受信型)重視の典型的な英和辞典であった。

さらに「標準單語及び其順位の指示」で次の説明がある。

「本辭典編者はソーンダイク一萬語表中より固有名詞・動詞の過去及び過去分詞（但し形容詞として廣く用ゐられるものは此限りに非ず）を除外し、更にホーン表中に現はれたる語にしてソーンダイク表に洩れたるものを以て之を補ひ、兩者を綜合して約一萬語を作製し、ソーンダイク表より引用したものには見出語の頭に † を附し、ホーン表に屬する語には * を附して之を明らかにした（中略）尚編者は此處に一言して使用者諸子の了解を求めておきたい。それはソーンダイク表中の7（卽ち6000－7000を代表する符號）の符號に就いて〻あつて、本辭典中に表示した7はソーンダイク博士表の6048－7262を、8は7263-8145を代表するが如く其他の符號數字にも多くの出入りがある。」（p. 5）これは10の数値が単純に1000語づつに区分されたのではないことを明示している。

その後の「附録重要二千五百語表」では次の説明をしている。

「巻末に五百語別の基本語二千五百語表を掲載しておいた。該表はソーンダイク博士の最も重要なる基本語二千五百語中より固有名詞を除去し、更にホーン博士二千五百語表にありてソーンダイク表に漏れたるものを以て補ひ、加ふるにゲーツ博士の千五百語表より前記二表に漏れたるものを附加したものである。ソーンダイク表に準據して便宜上二千五百語と稱するも同表

採録の単語數は三表を通算すれば三千十餘語に上る。」(pp. 5-6)

竹原が言及するゲーツの著作は欄外に提示したArthur Gates: *A Reading Vocabulary for the Primary Grades* (1926)で、ホーンと同年に刊行され、『一万語』同様にコロンビア大学Teachers Collegeから刊行された23ページの小冊子である（1932年の改訂版がある）。ゲーツは序文でソーンダイクと刊行前のホーンに言及し、その後（9－23ページ）にThe First 500 Wordsと区分する語から品詞別に列挙している。しかし、網羅する語数から『スタンダード』に影響が大きいとは言えないと判断できる。

竹原は基本的にソーンダイクとホーンの頻度調査を利用し英和辞典に語彙収録したと判断される。ソーンダイクは読解(reception)の語彙、ホーンは作文(production)の語彙ではあるが、上述のように重複が多いため利用したと考えられる。当時の英和辞典は読解を重視した編纂が主であり、readingだけでなくwritingに関する頻度資料も参照し、語彙収録を試行した英和辞典として『スタンダード』は第一号となる。書き言葉(written English)の頻度を重視した辞書である。

以下で竹原に関して極めて部分的であるが、調査した結果を記しておきたい。まず『スタンダード』の補遺にある基本単語二千五百語で挙げられているEの語を調べた。この一覧は『一万語』の補遺（127－134ページ）に掲げられたWords 1 to 500, Words 501-1000, Words 1001-1500, Words 1501-2000, Words 2001-2500と5分割した一覧を利用したものである。

表1『スタンダード』「基本単語二千五百語」
（* Horn、† Gates　から採用した語で、イタリックは遺漏の語）

1-500	each, ear, early, earth, east, eat, egg, end, enough, even, ever, every, eye
500-1000	†Easter, easy, edge, eight, either, else, enemy, †elephant, England, English, enjoy*[6], enter, entire, *envelope, *equipment, equal, escape, *especially, evening, everything, *exactly, *examination, *except, exercise,* expect, express, extend, *extra
1000-1500	earn, effect, elect, employ, empty, *enable, *endeavor, ere, especial, establish, *estimate, Europe, event, *evidently, evil, exact, example, excellent, *exception, experience, explain, *explanation, *extension, *extent, *extremely
1500-2000	eager, eagle, earnest, ease, easily, *eating, echo, *effective, effort, eighteen, elate, eleven, empire, engage, engine, entrance, erect, error, everybody, *evidence, examine, exchange, *excitement, excuse, expense, *expression, extreme

2000-2500	eastern, education, *educational, *Edward,* Egypt, eighth, election, electric, *elsewhere, embrace, emperor, *employee, encourage, endure, enormous, entertain, envy, *equally, *essentially, estate, eternal, eve, everywhere, *evil, exceed, excite, exclaim, *execute, *executive, *exhausted, *expensive

表1からはホーンから数多く、ゲーツから少数の語を採用したことは明確であるが、辞書本文の収録語と同一というわけではない。竹原の序にある固有名詞は収録対象にしないという考えからEdwardもEgyptもない。しかし、OEDを模倣したように固有名詞の形容詞形（例Egyptian）は収録している。人名、国名・地名等の固有名詞はリーダー等に出現する可能性は否定できないが、閉じた語群ではないため収録対象とはしなかったのであろう。

次に『スタンダード』の収録語でEの項の調査結果が表2である。†付き語は『一万語』に記載があるが竹原で無表示の語、△は未収録の語、そして『一万語』に未収録の語はイタリックで示している。

表2　417語

each, eager, eagle, ear, earl, earldom, early, earn, earnest, earnestness, *earning*, earth, earthen, earthenware, earthly, earthquake, ease, †easier, easily, east, Easter, eastern, eastward, easy, eat, eaves, ebb, eccentric, echo, eclipse, economic, economical, economist, economy, ecstasy, eddy, Eden, Edgar, edge, edging, edifice, edify, △Edith, edition, editor, △Edmund, educate, education, educational, △Edward, △Edwin, eel, e'er, efface, effect, effective, effectual, efficiency, efficient, effort, egg, △Egypt, Egyptian, eight, eighteen, †eighteenth, †eighth, eighty, either, eke, elaborate, elapse, elastic, elate, elbow, elder, eldest, △Eleanor, elect, election, elector, electric, electrical, electricity, elegance, elegant, element, elephant, elevate, elevation, elevator, eleven, eleventh, elf, △Elijah, △Elizabeth, ell. △Ella, △Ellen, elm, eloquence, eloquent, △Elsa, else, elsewhere, △Elsie, elves, Elysian, 'em, emancipation, embark, embarrass, embassy, embattled, ember, emblem, embody, emboss, embrace, embroider, embroidery, emerald, emerge, emergency, emery, emigrant, emigrate, emigration, △Emily, eminence, eminent, emit, △Emma, emotion, emperor, emphasize, emphatic, empire, employ, employee,

employer, employment, empress, emptiness, empty, enable, enact, enamel, enamor(ed), encamp, enchant, enchantment, enclose, encompass, encounter, encourage, encouragement, end, endanger, endear, endeavor, ending, endless, endow, endue, endurance, endure, enemy, energetic, energy, enfold, enforce, engage, engagement, engender, engine, engineer, England, Englander, English, Englishman, engrave, engraver, engross, enhance, enjoin, enjoy, enjoyment, enlarge, enlargement, enlighten, enlist, enmity, ennoble, enormous, enough, enquire, enrage, enrich, enroll, enrollment, ensign, enslave, ensnare, ensue, entangle, enter, enterprise, enterprising, entertain, entertainment, enthrone, enthusiasm, enthusiast, enthusiastic, entice, entire, entitle, entrails, entrance, entreat, entreaty, entrust, entry, envelop, envelope, envious, environ(s), envy, △Ephesus, epic, epidemic, Episcopal, episode, epistle, epitaph, epoch, equal, equality, equator, equip, equipage, equipment, equity, equivalent, era, eraser, ere, erect, erection, △Erie, △Erin, err, errand, error, eruption, △Esau, escape, eschew, escort, escutcheon, Eskimo, especial, espouse, espy, essay, essence, essential, establish, establishment, estate, esteem, estimate, estimation, estrange, etc., eternal, eternity, △Ethel, ethereal, eunuch, △Euphrates, Europe, European, △Eva, evade, evaporate, eve, even, evening, event, eventide, eventual, ever, evergreen, everlasting, evermore, every, everybody, everyday, everyone, everything, everywhere, evidence, evident, evil, evildoer, evince, evolution, ewe, exact, exaggerate, exalt, examination, examine, examiner, example, exasperate, exceed, exceeding, excel, excellence, excellency, excellent, except, exception, exceptional, excess, excessive, exchange, excite, excitement, exclaim, exclamation, exclude, exclusive, excursion, excuse, execute, execution, executioner, executive, executor, exempt, exercise, exert, exertion, △Exeter, exhalation, exhale, exhaust, exhibit, exhibition, exhort, exhortation, exile, exist, existence, expand, expanse, expansion, expansive, expect, expectant, expectation, expedient, expedition, expel, expend, expenditure, expense, expensive, experience, experiment, expert, expire, explain, explanation, *explanatory*, exploit, exploration, explore, explorer, explosion, export,

expose, exposition, exposure, express, expression, expressive, expressly, exquisite, extend, extension, extensive, extent, exterior, external, extinct, extinguish, extinguisher, extol, extra, extract, extraordinary, extravagance, extravagant, extreme, extremity, exult, eye, eyeball, eyebrow, eyelet, eyelid, eyesight

表2から次の事実が判明する。「凡例」で言及するように固有名詞は一般的には収録対象から除外しているが、Europe等のように完全に除外しているわけではない。またeasier, eighteen, eighteenth等の基本語の表示漏は不注意である。しかし、明らかに『一万語』に準拠している事実に疑問の余地はない。

次に、竹原で＊が付与されたホーンに準じた収録語を調査した（表3)。頻度を一部の語に付記する。表3 (1)は『スタンダード』で見出し語、(2)は追込み語、(3)は未収録語である。なお、数値はホーンによるもので、竹原の記述と必ずしも一致しない。ホーンは頻度を名詞・動詞の活用形、形容詞・副詞の変化形を個別にカウントしているため、過去分詞形、現在分詞形、名詞の複数形、動詞の三人称単数形、形容詞および副詞の比較級、最上級の形態を詳細に記述した資料である。例えばenclosedのように20世紀前期当時では郵送物に付く書面で一般的な語が高頻度であり、メール全盛の現在と著しく異なる。しかし、動詞encloseの過去分詞形として扱い、見出し語にはならない。一方で、形容詞economicと異なり、名詞economicsは見出し語扱いにするのは学習辞書では標準的で『スタンダード』の収録語は一部を除き動詞、名詞、形容詞、副詞等の内容語の収録が明らかである。

しかし、「凡例」の竹原の言明とは異なる語が収録されている。(1)に挙げた過去分詞形を一例にあげるとeaten, educated, elevated, exaggerated等は収録され、elected, employed, entitled, exhausted等は未収録である。これは頻度のみで採否を決定したわけでなく、「形容詞として廣く用ゐられるものは此限りに非ず」の判断を適応したためである。しかし、頻度という視点からは疑問が残る（cf. exacting)。

表3

(1) earnings 45, eaten 51, eating 469, eats 113, economics 127, editorial 66, educated 70, elderly 24, elective 27, elementary 91,

elevated 51, eligible 68, eliminate 165, elimination 18, embarrassing 52, embarrassment 59, emphasis 64, enclosure 271, encore 23, encouraging 126, endorse 45, enduring 47, engaged 590, engaging, engineering 192, enjoyable 113, en route 69, ensuing 57, entail 18, entering 525, entertaining 204, enumerate 17, environment 13, epithet, equally 402, equitable 35, erroneous 28, Esq. 20, ether 26, ethics 22, etiquette 22, evangelist 15, eventful 27, exacting 20, exaggerated 22, exaggeration 20, excepting 183, exciting 256, exclusion 14, expedite 39, expediency 20, experienced 227, experimental 24, expiration 79, explanatory 57, explicit 34, explode 14

(2) eagerly 42, earache, earnestly 129, effectively 55, eminently, emphatically, endorsement 111, enforcement 35, entirely 2568, especially 2870, essentially 44, evenly 33, eventually 106, evidently 880, exactly 1387, exceedingly 503, exceptionally 197, excessively 35, exclusively 76, existing 188, exquisitely 23, extended 522, extensively 37, extremely 1314, eyebrow

(3) earlier 513, earliest 1817, earned 93, ears, easiest, edges, editions, editorials, editors, effected 73, effecting 45, effects, efforts, eggs, elapsed 54, elected 654, electing, elections, elements, eliminated 63, eliminating, else's, embarrassed 39, embodied, embraced, embroidered 46, emotions, emphasized, employed 427, employees, employers, employing, employs, enabled 85, enables, enacted, enclosed 11,173, enclosing 7120, enclosures, encountered, encouraged 78, endeavored 82, endeavoring 172, endeavors, ended 176, endorsed 109, endorsements, ends, endured, enemies, energies, enforced, engagements, engineers 142, engines, engraved, enjoyed 1269, enjoying 698, enjoys, enlarged 48, enlisted, enrolled 60, entered 1265, enters, entertained 138, entertainments, enthused, entitled 1345, envelopes, equipped 316, erected, erecting, errands, errors, escaped 150, essays, essentials, established 362, establishing 95, establishments, esteemed 127, estimated 199, estimates, evenings, events, evidenced, evils, examinations, examined, examiners,

examining, examples, exceeds, excepted, exceptions, exchanged, exchanging, excited 360, excused 60, excuses, executed 381, exercised, exercises, exercising, exhausted 346, exhibited, exhibits, existed, exists, expectations, expected 1694, expecting 724, expects, expended, expenditures, expenses 687, experiences, experiencing, experiments, expired, expires, expiring, explained 663, explaining, explains, explanations, exposed 71, expressed 470, expresses, expressing, expressions, extending, extends, extras, eyed, eyes

表3で明確なことは、竹原が＊を付与した語はホーンで原則＊と†が表記された語であることである。ホーンは”Words preceded by an asterisk are found also in the Thorndike list. Words preceded by a dagger, while not reported by Thorndike in the form in which they appear in this list, are reported by him in the form from which they can be built up by adding endings not reported separately in his investigation.” (p.85) と説明し、後者の一例として動詞actとacts, acted, actingの活用形に関し、『一万語』には記載がないが動詞の語尾に付与すればこの形態は可能であるとする。ホーンはすべての形態を調査した。

表3から竹原は必ずしも高頻度の語を選択したとは言えない。(1)の一例として20世紀前期では低頻度のenvironmentがある。またenumerate, exclusion, explode等の低頻度の語も収録している。その点から頻度との強い関連性は明瞭でない。また逆の例も見られeliminatedは頻度が50－74でホーンの基準では（ソーンダイクに対応させ）6と表記されうる語であるが、竹原は未収録である。 (2) は形容詞からの派生語となる副詞が主で、現在との大きな違いはない。しかし(3) は主に分詞形、複数形、比較級・最上級、動詞3人称単数形等を除外すると、ほとんど収録対象にできる語彙はなく、頻度の高さが収録の基準にはなりえないことを明示している。頻度のみを重視すれば収録対象は増える。語彙収録で竹原は頻度を重視したが、(3) を収録しなかったのは、語尾変化により規則的に形成可能な語は収録対象としないという原則に基づくものである。

竹原は英和辞典の収録語彙として、ソーンダイクの『一万語』を最大限に利用し、さらに、上述した重複が多いという理由からホーンからソーンダイク

で未収録の語を採用した。しかし、ホーンでは内容語となる名詞、形容詞、動詞を最大限に利用し、高頻度とは限らない一部の語も収録対象とした。派生形語尾により形成可能な名詞と副詞は追込み語とし、一部の語彙の扱いでは不均衡が見られる。分詞形の形容詞の扱いはその典型である。前世期の米国で刊行された語彙頻度資料を最大限に利用し、収録語の判断は頻度という唯一の基準に拠らず編者の経験・主観が入ったと推測される。しかし、語彙収録での資料に準拠する方針は、竹原が和英辞典において出典を明記し用例を提示する辞書を編纂していた事実を考慮すると、頻度資料は客観性がより高いと判断し採用したことが主因である。21世紀の現在では当然視される姿勢であるが、竹原の英語教師としての鋭い語感を最新資料により裏付ける必要があったためであろう。当時として先駆的と評価できる。しかも竹原の視点が30年代に出版された英和辞典に影響を与えたことは興味深い。

4　1930年代の英和辞典の頻度情報

拙稿（2014）で言及したように、英語の初学者向けの英和辞典の編纂においても序文で言及されることがよくあるように、『一万語』は遅くとも『スタンダード』での導入を手始めに英和辞典の編纂においてよく知られた存在になったと思われる。拙稿（2014）で言及した辞書は割愛する。

(1)　三上節造『ダイヤモンド英和辞典』（1934）[*7]

経歴は必ずしも明確でないが、書名に武蔵高等学校教授・東京高等師範学校講師とある編者による辞書である。『新アラビアンナイト新訳絵入　上巻』（阿蘭陀書房、1916）にも従事した三上（1881－1957）が編纂に関わった本辞典は頻度を考慮した辞書とされる。『スタンダード』のように辞書の本文で明示的な印を付与していないため、頻度情報を考慮したか否かの判定は困難である。『スタンダード』同様の小型辞書（英語タイトル*A Diamond English-Japanese Dictionary*）でページ数は902ページ、蔵書検索でも花園大学にしかなく、ほとんど知られていない珍辞書である。「緒言」で次のように記している。

「本書は主として中等學校程度を目標としたものであるが、更に高等程度の學生並びに一般社會人にも適するやう語句の選擇に留意してある。即ち單語に於ては米國教育省選定の重要四千語及びソーンダイク博士・ホーン博士

の調査による標準單語を始めとし、有ゆる教科書参考書並に過去十數年間高等・専門學校入學試驗に現はれた語句等は餘す所なく之を採録し、尚重要固有名詞・新語・外國語を豊富に収載すると同時に、現今社會の趨勢より考察し（中略）英語辭典編纂上に前人未到の新境地を打開した。」（p. i）

この緒言からソーンダイクとホーンを参照したと判断されるが、両者を三上と詳細に比較しないと明瞭にならない。また当時の四千語は米国市民権獲得試験委員会選定『英語基礎單語4000』（ジャパンタイムズ社、1926）を示していると考えられるが、調査対象とはしない。簡略な調査から三上は収録語彙に関して頻度に関する調査を利用したことは明らかであることが分かる。

本稿ではeからemotionまでの見出し語の調査結果を示しておく。『一万語』に記載の134語のうち17語は未収録で、その多くは人名を示す固有名詞で、小型辞書のため収録対象にしなかったと判断される。その他の未収録語も派生語形、複数形、過去分詞形で収録対象から除外したとしても不自然ではない。三上は『一万語』を参照したと判断して問題はない。下記に列挙した三上で除外された語はホーンにも未収録の語である。

Edgar, Edith, Edmund, Edward, Edwin, Eleanor, Elijah, Elizabeth, Ella, Ellen, Elsa, Elsie, elves, embattled, Emily, Emma

ホーンに収録され本書にない語（派生語形を含む）は下記の29語で、複数形、分詞形、比較級・最上級が主とわかる。ホーンも参照した可能性はある。

earlier, earliest, earned, earning, ears, easiest, eats, edges, editions. editorials, editors, effected, effecting, effects, efforts, eggs, elapsed, elected, electing, elections, elements, eliminated, eliminating, else's, embarrassed, embodied, embraced, embroidered, emotions

調査対象が限定的で断言はできないが、本書は語彙頻度資料を参照し、竹原と同様に人名、複数形、分詞形、形容詞・副詞変化形は収録対象とはしなかったと言ってよい。

(2)　村田祐治『サン英和辞典』[*8]（1935）

英語タイトルは*The Sun English-Japanese Dictionary*であるが（以下『サン』と略記する）、国会図書館には1950年3月弘文社版173版が蔵書としてあることから、かなりの部数が出たとわかる（調査したのは1938年2月70版で『スタンダード』とほぼ同サイズである。本文1290ページ、不規則動詞表と

重要固有名詞（8ページ）を付加している。(『スタンダード』は本文1215ページ、不規則動詞表と基本単語二千五百語表を加え総計1234ページである。)編者は学習院から一高教授となり斉藤秀三郎を一高教授に推挙し、正則英語学校の創立と発展に貢献し、右腕として活躍した人物とされる。村田は緒言では次のように述べている。

「辭典であるから語彙の多いといふことは重要條件の一ではあるが、主として學生を目標とする辭典に於ては（中略）先ず如何なる語が基本的に重要であるかを指摘し、それ等の意味用法を徹底的に説明し（中略）「知らぬ語を引け」だけではなく、更に「これこれの語は特に重要語であるぞ、先ず讀め、よく讀んでその意味なり活用法なりを十分會得し暗記せよ」といふ所まで行かなければらないのである。」(p. i)

「日常そんなに澤山な語を必要とするものではない。（中略）先年米國教育當局で國民權獲得上必須なりとして選定した重要語は四千で、Thorndike の讀書上から選んだ基本語は一萬、Hornの作文上から選んだそれは九千餘語である（中略）先ず此等少數の基本重要語を知り、而して之を深く強く把握するといふことが、學習上徒勞を省き能率を高め得る」（pp. i-ii）

そして、凡例1では次のように述べている。

「本書は中等學校乃至高等學校學生用を主たる目的として編纂したものであるが、更に一般英書閲讀者並にsalaried man等の使用にも適するやう、語彙の選擇に十分の意を用ひた。即ち學生のためには、先ずbasic English（基本英語）として、Thorndike博士及びHorn博士のそれぞれの見地より選定した基本語と各種の教科書に使用せられた語彙とを考査して、約一萬一千五百語に＊印（▼印含む）を附してその重要性を指示し、その内更に米國教育當局の選定した（中略）重要四千語及び最近十四年間我國（中略）入學試驗に頻出した單語約三千語を考査して、約四千一百語に▼印を附してその最重要性を指示し、以て修學上の便を計つた。」（p. iii）

この緒言では明確にしていないが、『一万語』は1921年刊行のものであろう。ソーンダイクの改訂版（1931年）を参照することも不可能ではなかったと思われるが、理由は不明である。『サン』の収録語の調査結果が表4である。表4で『サン』に＊が付与された語は▼が付与された語より重要度が低いわけではない。上述のように、▼に基本的な語彙が多く含まれている。表4はeの項で＊と▼が付与された語の調査結果である。○の付く語はソーン

ダイクに未収録の語で、下線付きの語はホーンにも未収録の語である。[*9]

表4

earl, earldom, earnings, eastwards, eaves, ebb, eccentric, eclipse, economic, economical, economist, eddy, Eden, edging shears, edifice, edify, edition, ○editorial, eel, efface, effective, effectual, efficacy, efficient, electrical, elevator, elf, ○eligible, ○eliminate, ○elimination, ell, eloquence, eloquent, emancipation, embark, embarrass, ○embarrassing, embassy, embattle, ember, embody, emboss, embroider, embroidery, emerald, emerge, emergency, emery, eminent, emit, emotion, ○emphasis, emphasize, emphatic, employee, empress, emptiness, enact, enamel, enarmour, encamp, enchant, enchantment, ○enclosure, encompass, ○encore, endanger, endear, ending, ○endorse, endow, endue, endurance, energetic, enfold, engage. engagement, engender, England, Englander, engrave, engross, enhance, enjoin, enlighten, enlist, enmity, ennoble, enquiry, enrage, enrich, enroll, ○en route, ensign, enslave, ensnare, ensue, ○entail, entangle, enterprise, enterprising, enthrone, enthusiasm, enthusiast, enthusiastic, entice, entrails, entreat, entreaty, entrust, ○enumerate, envelop, envious, environ, epic, epidemic, episcopal, episode, epistle, epitaph, epoch, equality, equator, equip, equipage, equipment, ○equitable, equity, equivalent, era, ere, erection, ○erroneous, eruption, eschew, escutcheon, Eskimo, especial, espouse, espy, ○Esq., essay, essence, essential, estimation, estrange, eternity, ○ether, ethereal, ○ethics, ○etiquette, eunuch, European, evade, ○evangelist, evaporate, eve, eventide, eventual, evergreen, evermore, everybody, everyday, evildoer, evince, evolution, ewe, exaggerate, ○exaggeration, exalt, exceeding, excellence, excellency, exceptional, excessive, excite, ○exciting, exclamation, exclude, exclusion, excursion, execution, exempt, exert, exertion, exhalation, exhale, exhibition, exhort, exhortation, expand, expanse, expansive, expectation, ○expediency, expedient, ○expedite, expel, expend, expenditure, explanation, ○explanatory, ○explicit, ○explode, exploit1, exploit2, exploration, explorer, explosion, exposition,

exposure, expression, expressive, expressly, exquisite, extension, extensive, exterior, external, extinct, extinguish, extol, extra, extract, extravagance, extravagant, ○extremely, exult, eyeball, eyebrow, eyelet, eyelid, eyesight 233 語

▼

each, eager, eagle, ear, early, earn, earnest, earth, earthly, earthquake, ease, easier. easily, east, Easter, eastern, easy, eat, echo, economy, edge, editor, educate, education, educator, effect, effort, egg, eight, eighteen, eighteenth, eighth, eighty, either, elate, elbow, elect, election, elector, electric, electrician, electricity, elegant, element, elephant, elevate, elevation, eleven, eleventh, elm, else, elsewhere, emblem, embrace, emigrant, emigrate, emigration, emperor, empire, employ, employee, employer, employment, empty, enable, enclose, encounter, encourage, end, endeavor, endless, endure, enemy, energy, enforce, engage, engine, engineer, English, engraver, enjoy, enlarge, enormous, enough, enter, entire, entitle, entrance, entry, envelope, envy, err, errand, error, escape,　○especially, establish, estate, esteem, estimate, etc., eternal, even, evening, event, ever, everlasting, every, everyone, everything, everywhere, evident, evil, exact, examination, examine, examiner, example, excel, excellent, except, excess, exchange, excite, exclaim, exclusive, excuse, execute, executive, executor, exercise, exhaust, exhibit, exile, exist, existence, exit, expatriate, expect, expense, expensive, experience, expert, expire, explain, explore, export, expose, express, extend, extent, extraordinary, extreme, eye　154語

この表4から、ほぼ全ての表示はソーンダイクとホーンを参照し付与していることが明確になる。ただし、ごく少数の語（edging shears, efficacy, electrician等）は他資料あるいは編纂者により追加されたと判断される。

しかし、表4から興味深い事実が分かる。『スタンダード』に収録されたソーンダイクとホーンの語彙で、『サン』にも収録された語がある。しかし、下記は頻度が30 未満の語である。『サン』が頻度をどれほど慎重に考慮したかも極めて疑問で、竹原と同様にソーンダイクだけではなく、ホーンを積極

的に語彙の収録に利用した事実は否定できない。『スタンダード』の語彙収録の方針が後の辞書に影響を与えている証である。

elective, elimination, encore, entail, enumerate, environment, erroneous, Esq., ether, ethics, etiquette, evangelist, exacting, exaggeration, exclusion, expediency, explode

このように、30年代中期までの英和辞典ではソーンダイクとホーンの語彙調査を収録語彙と頻度表示の参考にしていたことが明確であり、日本人学習者用に英和辞典では後に様々な資料を駆使し収録語彙の重要度を表記する試行が繰り返されることとなる。その点で、竹原の頻度表記は英和辞典の語彙に関する指標を示す出発点となり存在価値は極めて大きい。

(3) 30年代以降

1910年代に米国で行われた語彙の統計的研究の成果が『一万語』となり刊行され、その後に我が国でもパーマーの *Interim report on vocabulary selection*（1930）、および *Second interim report on vocabulary selection*（1931）、さらには *Second interim report on English collocations*（1933）が続いて刊行され、牧一とL．フォーセット『英語重要単語の統計的研究』（1932）も刊行された。この事実から、ソーンダイク（とホーン）を語彙の収録に利用した英和辞典は主に20～30年代に出版されたものが多いと考えても不然ではないが、さらに詳細な調査および検証が求められる。

5　まとめと課題

拙稿（1999）はソーンダイクの研究と業績、および関連する母語話者向けの国語辞典が焦点で、竹原にはほとんど言及できなかった。そこで、本稿は竹原の先駆的な英和辞典を中心とした論考とした。1920年代から30年代、更にその後の英和辞典にソーンダイクが関わった『一万語』、『二万語』、『三万語』がどの程度の影響を与えたか、またLorgeとの語義調査に関する共著 *A Semantic Count of English Words*(1938) およびその後のLorge：*The Semantic Count of the 570 Commonest English Words* (1949) 等の影響を受けた辞書に関する詳細は解明できていない。

前近代的な人海戦術による恣意的、主観的なデータ収集と分析は、現代の

コーパス言語学の視点からは稚拙な試行と映るであろうが、ほぼ一世紀に遡る大正期から昭和初期の米国の語彙頻度調査を英和辞典に果敢にも取り入れた竹原の教師としての先見性と功績は評価に値する。さらに、教科書編纂にも基本語彙を活用する効率的学習の合理化を提唱したことも評価できる。

語彙は外国語学習では極めて重要であるが、個別の語彙かフレーズの語群か、時代により考え方の変遷は不可避ではあるが、現在では発信される英語情報の約8割以上は3000語程度でカバー可能とする調査もある（後述を参照）。これに関連し竹原（1934a）の「緒言」に当時として先駆的と思われる記述があり、少々長いが引用したい。

「過去二十年間語學教師は貴重なる教授上のテクニークを蓄積したが、此テクニークは主として常識に基いたものである。而も語學教師の有する實際的智識は、精査吟味を經て科學的基礎の上に置く事が肝要である。

今日特に考慮を要する緊急問題は、學習課程に準じて秩序的に單語を習得する方法である。即習の語彙を暗記する事には少しも害はない。暗記は語學學習の唯一の方法である。然しそれには條件が伴ふ、即ち語句は最も多く使用されるものから學ばなくてはならぬ。一般の初歩讀本の編纂は此原則に依つてゐる。又依る可きものである。然し外國語に於ける使用度數に基く語彙順位は、我英國では米國に於けるが如く完全に確立してゐないのである。…斯の如き基本語順位表の科學的編纂法は米國に學ばねばならぬ。

基本語學習が學習能率増進の第一歩である事は常識的に考へても明白な事實であつて敢へて爰に辯明しない事であるが、今私は之を數學的に説明したいと思ふ。シカゴ大學教授ブリード博士が行つた統計的調査[*10]の結果得た結論に從ひ英米人が日常使用する英語單語の種類を一萬とせんか基本語の價値は次の如き數字になつて現はれて來る。（一覧省略）

即ち最も頻繁に使用される一百語は日常使用する英文の總語數の五八パーセント、五百語は八二パーセント（中略）を占めてゐるのである。こゝに注意すべき事は三五〇〇以上の單語（此總数三〇〇〇）は日常英文の一パーセント強にしか達しない、換言すれば最も基本的な三千五百語の價値は九八・三〇パーセントであるが、それ以外の三千語の使用價値は一パーセントにしか當らないのである。」（pp.1－3）

竹原のブリード博士の調査書の紹介は、コーパスを利用した高頻度の語彙調査から見ても興味深い。話し言葉と書き言葉の見出し語での選別を行い、高頻度3000語を示すロングマン学習英英辞典の関連著書Bullon & Leech (2007) のThe importance of frequencyに次の記述がある（提示されたチャートは割愛）。

The chart below shows a frequency graph for the 10,000 most frequent words of English…The most frequent words make up a very large percentage of the language as it is written or spoken. The most frequent ten words … account for around 25 % of all written and spoken English words. But these top ten words do not carry much meaning themselves…At the 3000 word mark, the coverage extends to 86%... by knowing just 3000 words, a learner of English is in a position to understand 86% or more of what he or she reads…. (pp. 1－2)

ロングマンの辞典では固有名詞、国名とその形容詞形、数、七曜日名、十二月名等は除外しているが、竹原が注目した3500という数値が現代のデータ準拠の辞書の数値と著しくかけ離れていないことは、基本語の確立を目指した前世紀の竹原の様々な語彙調査資料に対する強い関心と語学的に鋭敏な感覚の証しと言える。

英語による読み・書きは前世期に於いては最も重視された内容であり、聞く・話すも軽視されたわけではないが、現在と状況は著しく異なる。辞書において読解に必須の語彙を収録しようとしたのは自然な流れであった。

竹原は『スタンダード』の語彙選定で20世紀前期の米国の頻度調査を活用し、日本人学習者に不可欠な語彙を網羅しようと編纂したことは疑いなく、その功績は否定できない。しかし、自己が編纂した和英大辞典との比較では、見出し語に関する語義、用例、成句等の記述は決して詳細で学習者を強く意識したとは言えない。1910年代から20年代にかけては井上十吉、斉藤秀三郎、入江祝衛、勝俣銓吉郎等の辞典を含めた著作がある状況で、20年代後半に米国の基本語に対する強い関心と大きな影響から、学習者が優先し習得すべき語彙を重視し竹原が編纂した辞典が『スタンダード』であった。和英大辞典の編纂により利用可能な資料は膨大であったと考えられるが、最大限に有効活用できる英和辞典の編纂には至らなかった。

脚注

＊1　『スタンダード和英辞典』は1941年に刊行されている。

＊2　竹原は米国・加奈陀諸大学連合語学調査委員会（The American and Canadian committees on modern languages)がシリーズでマクミラン社から発行した原著（1929）に基づき、『佛蘭西基本単語』、『佛蘭西基本熟語』、『獨逸基本熟語』、『獨逸基本単語』の邦訳版の監修者として名前がある。基本語彙叢書は西語もあったが、英独仏の語彙の頻度が関心を集めていたと分かる。

独露の言語教育に携わる教師による語の頻度調査をソーンダイクが知ったことが語彙頻度調査のきっかけとなったとし、当時の米国の国語教育に関してWilliam H. DuBayはThe Principles of Readability(2004:11）で次のように記している。

“During the 1920s, two major trends stimulated a new interest in readability: 1. A changing school population, especially an increase in "first generation" secondary school students, the children of immigrants. Teachers reported that these students found textbooks too difficult. 2. The growing use of scientific tools for studying and objectively measuring educational problems. One such tool, Thorndike's Teacher's Word Book (1921), was the first extensive listing of words in English by frequency. It provided teachers with an objective means for measuring the difficulty of words and texts. It laid the foundation for almost all the research on readability that would follow.”（www.impact-information.com/impactinfo/readability02.pdfを参照。）

また竹原（1934a）の「緒言」では「基本語の確立により教科書の單語の統一を促すと共に他方試驗問題の單語の制限を行ふことが、今日識者間に唱道さるゝ語學教育簡易化の最捷徑であり、且最も實用的價値多き語彙の習得に注意を集注することにより語學學習能率の増進を期するのは最も良き具體案と信ずるものである。この意味に於て、私は昭和四年以來ソーンダイク（讀書本位）、ホーン（作文本位）其の他各種の基本語表を紹介すると同時に既成四十有餘の基本語表を蒐集し、之が比較研究をなした結果、之等の諸表を合併して一種の綜合基本語表を作成し、之が公刊を企圖したのである」と述べている（pp.3－4)。昭和4年（1929）は『スタンダード英和辞典』が刊行された年であり、竹原は英和辞典をきっかけに様々な基本語彙一覧を参照し日本人学習者が最優先して習熟すべき語彙を模索したことが分かる。英語の出発点が『スタンダード英和辞典』であり、竹原のその後にとっても辞書出版の意義は大きかったと考えられる。

しかし、同書（1934a）でも『一万語』の出版年を1922年としているが、1921年とタイトルページある初版の翌年に第二刷が出版されたのであろうか。脚注5参照。

＊3　興味深いのは和英大辞典の補遺の内容である。1512ページの本文の直後にA List of Prepositions Used After Certain Words（1513－1618ページ）とする記述がある。拙稿（土肥　2016）で言及した文法的連語に関する記述である。日本人学習者にとり弱点であり、的確な英文を書けるように学習させるためには和英辞典では不

可欠である。入江祝衛が関与した『新式日英辞典』(1905)の補遺が先行する辞書として連想される。

＊4　『スタンダード英和辞典』は1929年5月15日が初版の発行で、その後100版は1936年11月、200版が1943年6月に出ている。最新のネット検索（2017年1月末）では1954年の289版まであり、部数が多く出たことがわかる。なお、1938年2月の126版を訂正版として出しているが、本文を含め総ページ数に変更はない。

＊5　1922年は竹原の誤謬であろう。ネット検索による大手前大学の竹原文庫にある『一万語』は1921年出版と表記がある。第二版はタイトルページ中央部にSecond Edition, January 1927と記載がある。

＊6　enjoyは『一万語』で頻度8と低く、第二版（1927）でも enjoyは8の表記しかない。ホーンでは2016/1bの記述がある。しかし、表1のように『一万語』の補遺にはeasy, edge等と並びWords 500-1000に入る語と記されている。『一万語』の頻度の誤謬か、1bの表記漏れなのか不明であるが、500-1000の頻度となる記述はホーンに準拠した判断である。

＊7　調査した『ダイヤモンド英和』(愛之事業社)は昭和9年1月発行と記すが、早川(2006)では昭和7年に至誠書院・一新社の共同出版で出たとある。しかし、昭和7年4月に愛之事業社が発行した版も存在し、複数の出版社から発行されたと考えられる。しかし、調査した昭和9年1月の発行版と7年の発行版の奥付が一致しないのは不可解である。後者は17版の出版年月を昭和9年9月とするが、調査した前者は9年2月を17版の発行日とする。後者では初版発行日等に誤謬があると考えられるが、総ページ数に変更はなく、調査に影響はない。

＊8　辞書のタイトルページにある辞書名と奥付に記された辞書名には微妙な違いがある。後者は『熟語本位サン英和辞典』と表記している。斉藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』を連想させるが、編者と出版社が斉藤と深いつながりがあるためと考えられる。

＊9　exploitはソーンダイクでもホーンでも品詞表記はなく、無表示とする

＊10　ここに言及があるブリードは竹原（1934b：15）にはF. S. Breed, Ph.D., the University of Chicago：*Selecting Words to be Taught*とありPh.D.論文と思われる。未見資料で出版年は不明、シカゴ大学図書館でもこの書名は検索できない。彼の結論を竹原（1934b: 16）は「吾人は此表によつて語學學習上にも報酬遞減の法則(the law of diminishing returns)が行はれてゐることを知るものである。ホーン博士の調査に現はれた數字は、三千乃至四千以上の語彙を教へんとて企てることの學習上不經済であるといふ結論に吾々を導くものである。三千乃至四千の語彙さへ教へて置けば日常必要なる總語彙の98乃至99パーセントを教へることになるのである。残りの1パーセント乃至2パーセントは稀に使用さるる語である…」と学習者にとっての語彙数への言及は、現代コーパスによる語彙調査との比較において興味深い。

主要辞書

[　]　参照版の発行年

竹原常太『スタンダード和英大辞典』寶文館、1924.　[1925]
---.『スタンダード英和辞典』大修館書店、1929. [1952]
三上節造『ダイヤモンド英和辞典』愛之事業社、1932.[1934]
村田祐治『サン英和辞典』日英社、1935

主要参考文献

＊　国会図書館デジタルライブラリー資料

池田正義　1973「竹原常太の本邦英学史上への貢献」『英学史研究』第6号: 129-133.
馬本　勉　2005「竹原常太の *The Standard English Readers*」『日本英語教育史研究』第20号：111－130.
高梨健吉、出来成訓 1993『英語教科書名著選集　別巻　英語教科書の歴史と解題』大空社.
竹原常太　1906　＊『英語慣用句詳解』(*Idiomatic English Phrases Now in Use*) 三省堂.
---. 1930　＊『語学教育の合理化』大修館書店.
---. 1934a『ソーンダイク基本英語単語』(*Thorndike's English Word Book*)　大修館書店.
---. 1934b ＊『高等女学校英語教材の合理化』大修館書店.
---. 1936『中等学校英語教材の科学的編纂法』大修館書店.
---. 1936『ソーンダイク基本構文　新英文解釈法』大修館書店.
堤美佐子1999「『スタンダード和英大辞典』編者　竹原常太」『日本英語教育史研究』第14号：121-139.
土肥一夫　1999「ソーンダイクとアメリカの学習辞典」『東横英文学』No.8: 17―77.
---. 2000「ソーンダイクの英英辞典(2)」『東横英文学』No.9：37―64.
---. 2001 Dr. Thorndike's Influence on Learners' Dictionaries.　*Dictionaries: Journal of The Dictionary Society of North America.*　No. 22: 153-162.
---. 2014「1930年代の英和辞典」『東京都市大学共通教育部紀要』第7号：15－30.
---. 2016「入江祝衛の辞書」『東京都市大学共通教育部紀要』第9号：47－65.
早川　勇　2006『日本の英語辞書と編纂者』春風社.
穂積包昭　2008　「『スタンダード和英大辞典』と編者竹原常太」『英語研究のバックロード』開文社出版.　73－112.
Bullon, Stephen and Geoffrey Leech. 2007. "Longman Communication 3000 and the Longman Defining Vocabulary." *Longman Communication 3000.* Harlow, England: Pearson Education Limited, 1-8.

Gates, Arthur. 1926. *A Reading Vocabulary for the Primary Grades.* New York: Teachers College, Columbia University.

---. 1935. *A Reading Vocabulary for the Primary Grades:* Revised and Enlarged. New York: Teachers College, Columbia University.

Horn, Ernest. 1926. *A Basic Writing Vocabulary: 10,000 Words Most Commonly Used in Writing.* Iowa City, Iowa: The College of Education, University of Iowa.

Mangieri, John. 1974. *The development of word lists: A historic overview.* files.eric.ed.gov/fulltext/ED099831.pdf -

Thorndike, Edward. 1921. *The Teacher's Word Book.* New York City: Teachers College, Columbia University. [1921. Second Edition, 1927.]

---. 1931. *A teacher's word book of the twenty thousand words found most frequently and widely in general reading for children and young people.* New York: Teachers College, Columbia University.